

# avanti

働く女性を応援する  
ネットワーク型情報誌

アヴァンティ  
北九州

DECEMBER

# 12

2008

特集

家事は男の甲斐性か、トレンドか。🍲🎵

# “家事” 達者な男たち。

いちおしコース紹介します。

一年間がんばった私にご褒美しよう!

2008年  
おすすめ  
グルメ

レストラン of the year  
宴会 of the year

こんな症状に注意!

カラダと  
心のSOS



# 私が27歳の頃

地元で活躍する素敵な女性を紹介。アキラコシティが考える人生の分岐点「27歳」の頃、彼女たちは、どんなことを考え、どんなことをしていたりしてしまっただろうか？

## 籠田 淳子さん

**Profile** 有限会社ゼムケンサービス代表取締役。1965年、北九州市出身。西南女学院中高、滋賀県立短期大学を卒業後、建設関連会社と実家のハゼモト建設株式会社で実務を積み、2001年に事業継承。北九州市開発審議会委員、北九州市公共事業評価委員、欠陥住宅調査に於いてのTVコメント出演、女性の感性を生かしたプロデュースチーム「Re Born」にてウエディングやスイーツショッププロデュースにも挑戦中。

## 人が十分頑張るところを、私は十二分に頑張っていく

両親は建設会社を経営し、幼い頃から現場が遊び場。二代目として育ち、すんなり今の地位に就いたと思いがちだが、事実は違う。実際、この世界に足を踏み入れようとした際、父は猛反対だった。理由は「女はこの世界で活躍できないから」。棟上げに女性が上がれない男社会。娘の将来を思えばこそその一言だった。しかし負けん気の強い彼女はあきらめない。「国公立で2年だけ」という条件をクリアできる学校を探し出し、建築学科に進学。彼女の建築家人生の第一歩だった。

がむしゃらに進んだOL時代

幼い頃から「人が十分頑張る

なら、あなたは十二分に頑張るなさい」と育てられた籠田さん。導かれるように入った建設の世界は、午前様帰宅が当たり前。ドワーク。決して楽ではなかったが、仕事の楽しさに魅了された彼女は、がむしゃらに働く。そして2年間で貯めた100万円を握りしめ「身銭学習」を執行。バックひとつでヨーロッパを周遊し、自由設計の素晴らしい実感するなど、多くのことを体で学ぶ日々を送った。

帰国後は店舗デザインの仕事に就職。何事にも全力で取り組む籠田さんは、次第に大きな仕事を任せられていく。しかし、ある現場で「女であることの壁」にぶち当たる。何百人ものスタッフ全員が男性という環境で、どんなに働いても「女はつまらん」と評価されない。あからさまなイジメにもあった。「でも辞めたいと思っただけは一度もなくて。善いことをやればいつか喜びがくると信じていたから」。増え続ける仕事は評価の証し。25歳で級建築士の資格を取得し、その後も数々の店舗や住宅を街に誕生さ

せた。建築家として更なる飛躍を目指していたとき、父から戻ってきてほしいと懇願されたのは、27歳の頃だった。

### 私が頑張りを続ける理由

東京に出て活躍する道も開けていただけに、気持ちは揺れた。しかし「いつか親の手助けをしたい」と思っていた籠田さんは、実家に戻る決意をする。実は彼女、幼い頃から両親と一緒に寝た記憶がない。父は会社を創業し、働き詰め。母といえば、昼は会社で父のサポート、夕方は職人に食事を食べさせ、夜は飲食店を経営して働く日々。籠田さんは夜な夜な「お母さんに会いたい」と泣きじゃくり、兄と二人、身を寄せ合ってきた。「親が命を削って働く姿を見て育ったから、私にとつて頑張ることは当たり前。親の家業を、とても大事に思っています」。彼女に宿る強靱な精神力は、まさに親譲り。実家に戻る決断も、ごく自然なことだった。

### 転機となった、父の死

ハゼモト建設では今までの経験が活かし、業績アップに貢献。プライベートでは仕事を応援してくれる伴侶に出会い、結婚。すべてが順調だった彼女に、突然「父の死」という悲劇が訪れる。

33歳の頃だ。どんな仕事にも最大の評価をくれた父の死は、籠田さんにとつて耐えがたいものだった。仕事も手に付かず、ふさぎこむ日々。しかし、そんな彼女を救ったのも、やはり父だった。「父の死後、男児を授かっていたことがわかって、父の生まれ変わりと、誰もが思いました」。

悲しみから立ち上がった籠田さんは実家の会社を離れ、現在の会社を一人で始動。安心して子どもを儲けよう「儲かる空間創り、街創り」を理念に掲げ、店舗、住宅、公共工事、コンсалタント、プロデュース業など、女性の感性を生かした幅広い事業を展開。今後は、女性ならではの設計や現場監理など、男女が互いの強みを生かせる体制づくりの強化を目指している。夢を尋ねると「社員がその人らしさで私を超え成長していくこと」20代に感動したヨーロッパの街並みを母に見せること」と、目を輝かせた。

「この会社は父が将来、ハゼモト建設ではできない仕事を私と一緒にするために創つておいたもの。社名の由来も、建築で善を生むサービス業」からだ」と気づいて……。そんな父の遺志を大切にしながら、父と娘が尊敬しあい築いてきた道。その道を夫も応援し、今度で駆け抜ける母の後ろ姿を今度は一息子の粋(すい)君も同じように見つめている。



▲23歳の頃、身銭学習で訪れた、ギリシャのイラ島にて。